

義務教育の役割とは何だろう？ 藤沢の調査から考える「貧困」と「学力」。

「なぜ、勉強してるの？」

「なぜ、勉強してるの？」

そう聞かれたら、私たちはどう答えるでしょう。

日本の教育界はこの10年余、「学力向上」に翻弄されてきました。ですが、それは一体何のため、誰のための「学力向上」だったのでしょうか。

「学力」とは何か。それは誰のためのものなのか。

その本質的な論議もなしに、全国学力学習状況調査の平均点だけを競い合うような論議が横行しています。

「なぜ勉強するのか」

「学力とは何か」

もちろんその答えはひとつではありません。ひとり一人が見つけ出していくものです。



藤沢市が昨年実施した「子どもと子育て家庭の生活実態調査」から、その意味を考えてみたいと思います。

「俺、漢字がわからねえ」

私にはこんな経験があります。

かつて私が中学校で教えた中に、無免許でバイクを乗り回しては補導される、ということは何度も繰り返していた卒業生がいました。

あるとき私は彼をつかまえて、「ちゃんと免許を取ろうよ。そうしたら一緒にツーリングに行こうぜ。その方が楽しいよ。」と話しました。

すると彼は、こう答えるのです。

「試験なら何度も受けたよ。でも俺、受からねえんだよ。」

「だったら免許試験の勉強、手伝おうか？」

私がそう話すと、彼は急に真顔になって言いました。

「俺、漢字がわからねえ。九九だって言えない。試験なんか受かるわけじゃないじゃん。」

思いもよらない言葉でした。私が思わず「ごめん、知らなかった……」と言い淀むと、彼は私をじっと見て、吐き捨てるように言いました。

「竹村、バカかよ。『漢字が読めない』なんて、み

っともなくて言えるわけねえじゃん。俺だけじゃない。そんな奴いっぱいいるよ……」

彼は、少し涙ぐんでいたようでした。

ショックでした。漢字の読み書きが十分できず、九九も言えないまま卒業して行った（させてしまった）生徒がいる。その事実を突きつけられた瞬間でした。

彼は別に、知的障害があったわけではありません。おそらく小学校低学年での勉強のつまづきを取り戻せずに、中学を卒業して行ったのだと思います。

それは、「勉強をしなかった」彼の「自己責任」なののでしょうか？

彼の家庭は、決して裕福とは言えませんでした。

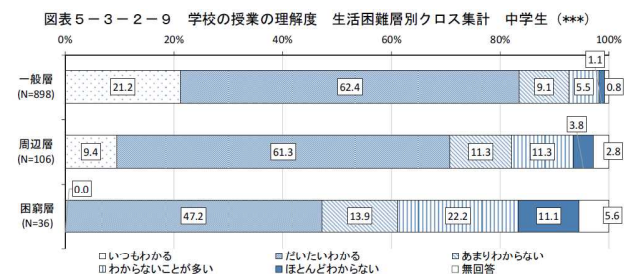
両親は働きづめで彼の勉強を見てあげられる余裕はありません。でも彼は両親の仕事を一生懸命に手伝ったり、小さな弟や妹の面倒を見たりしていました。

責任を言うなら、そんな彼に寄り添い、最低限の学力を保障できなかった私にあったのではないかな……

「竹村、バカかよ」という言葉は、今も私の心に棘のように残っています。

家庭の経済的状況と学力

昨年、藤沢市は「藤沢市子どもと子育て家庭の生活実態調査」を実施しました。



この結果からは様々なことが読み取れますが、中でも衝撃的だったのは「生活の困難度」と「学力」の関係でした。

調査対象の家庭をその収入によって「一般層」「周辺層」「困窮層」とに分け、それぞれの家庭の子どもの授業の理解度をたずねたところ、一般層では21.1%いた「授業がいつもわかる」は、困窮層では0%。

一人もいませんでした。

授業が「あまりわからない」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」は一般層では15.7%でしたが、困難層では47.2%と半数近くにのぼりました。その中でも「まったくわからない」は困窮層では11.1%と、1割を越えます。

「家庭の経済的状況」と「授業の理解度」に、こんなにもはっきりと相関関係が表れてしまったのです。

42%が「夢はない」と回答

「別に学力だけがすべてではないはずだ。」という声もあるでしょう。私もそう思います。

ただ一方、だからと言って子どもたちが学力を身に付けることに「意味がない」と言うってしまうのも極論過ぎます。それでは先生たちは、何のために毎日授業をしているのでしょうか。

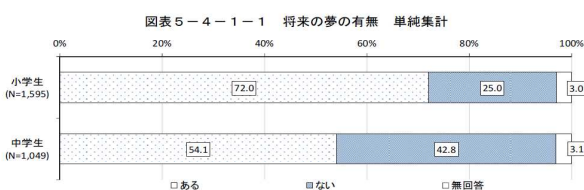
ここで言う「学力」とは、受験のための学力のことではありません。「自分で自分の将来を選び取っていくための力」のことです。

私たちは、経済的理由によって学力を身に付けることができず、そのことによって自分の将来が限られてしまっている子どもたちを見てきました。子どもの貧困対策大綱が「その生まれ育った環境によって将来を左右される」と指摘した、まさにそのことです。

進学だけがすべてではありませんが、自分から「進学しない」と、「進学したくてもできない」とではまったく意味が違います。

このことにかかわって、生活実態調査では「将来の夢がありますか」という設問も設けています。

問 将来の夢がありますか



回答した中学生の42%が「将来に夢はない」と答えています。その理由で多かったのは「なりたくない」「夢がかなえられるとは思えない」でした。

この「夢がない」という回答も、家庭の経済力と大きく関係していました。子どもたちの経済的格差が学力の格差となり、そしてそれが「夢や希望の格差」につながっています。このままで良いのでしょうか。

義務教育段階の公立学校の役割とは何でしょうか。

一部の首長は、教育の目標に「国際社会で活躍できる日本人の育成」を掲げます。ですがそんな政策をとれば、今回の調査で明らかになった「勉強がわからない」子どもたちは、真っ先に排除されていくでしょう。

学校の役割は決してそのようなことではありません。子どもたちに生きる力としての学力を「保障」し、格差に抗い、そのことを通して子どもたちの「夢」や「希望」を保障することではないのでしょうか。

勉強って、楽しいもの

「そんなことはきれい事だ。簡単にはいかない」という声もあるでしょう。そうかもしれません。

ですが私は、これまでに全国学力学習状況調査でトップレベルの結果を生んでいる秋田県や大阪府茨木市を訪ねて、話をうかがってきました。

そこで取り組まれていたのは「競争」ではなく、勉強がわからない子どもに対するていねいな支援による、「学力の底上げ」でした。すべての子どもへの学力保障が、結果として成果につながったのです。

どちらの学校でも、先生が「子どもたちは授業が楽しい、と言ってくれます」と話していたことが忘れられません。ここにヒントがあるのではないのでしょうか。

「なぜ、勉強ってするの」と聞かれたら、私も「勉強って、楽しいから」と答えてきました。

学校や勉強は、本当は楽しいもののはずです。

まず子どもたちが「楽しい」と思える学校や授業をつくること。学校が安心して過ごせる場所になること。そのあたりまえのことが学力「保障」につながり、結果として貧困の連鎖を断ち切るのではないのでしょうか。

無論そのためにも、先生が日々の業務に追われるのではなく、笑顔で子どもたちに向き合える環境を整えるための多忙の解消は不可欠です。

また、「授業がわからない」子どもたちの支援は学校だけで担えるものではありません。

「子どもの貧困」とは、「親の貧困」が子どもに投影されたものです。子どもの学力保障のためには、親も含めた家族全体の支援が必要です。

6月の藤沢市議会で、私の「今回の調査結果を市全体としてどのように活かしていくのか」という質問に、鈴木恒夫市長はこう答えてくださいました。

今回の調査結果から、家庭の経済的・社会的状況などの要因が子どもたちの学力だけでなく将来の夢や希望にも影響をもたらしているという実態が明らかになったことについては、改めて重く受け止めております。

今後も市全体で課題や認識を共有し、子どもたちや子育て家庭に寄り添う取り組みを、これまで以上に進めてまいりたいと考えております。

「子どもたちの笑顔があふれる学校」こそ、教育の本質かもしれません。その理想をめざして、取り組みましょう。